

高齢者における自立に向けたストーマケア

堀井 真実 堀野みちる

静岡赤十字病院 2-5病棟

要旨：90歳代と高齢な患者がストーマ造設術を受けた。自宅退院に向けて、A氏と長男に自立に向けたストーマケアについての看護を展開した。患者本人にストーマケアの指導を行い、便破棄の自己管理はできるようになった。長男にパOUCH交換を行ってもらうことにより、ストーマケアが確立した。

今回の事例を通し、高齢者のストーマケアは本人のADLや理解力、性格を考慮した上で、患者・家族を含めて目標を設定し、できることは患者の自立を促し、できないことは協力者が補い、ストーマケアの確立を目指していくことが大切であると学んだ。

Key words：ストーマケア，高齢者

I. はじめに

今日、日本では高齢化が加速しており、在宅で生活を送っている高齢者も多く、老老介護も増加傾向にある。高齢になるにつれて身体的機能も衰退していき、認知機能も低下していく。今回、90歳代と高齢な患者がストーマ造設術を受けた。自宅退院に向けて、A氏と長男に自立に向けたストーマケアについての看護を展開した。今回の事例を通して、ストーマケアについての指導の一連を振り返り、高齢者のストーマケアを確立させるためには、看護師としてどのような関わりが必要であるか振り返り、ここに報告する。

II. 患者紹介

90歳代、女性、ADL自立、70歳代の長男と二人暮らし、長男は理解力良好で宗教関連の仕事をしている。装具交換の協力は得られる状況であった。A氏は陰部パジェット病による肛門のびらんが見られ下血を繰り返していた。疼痛も強く、肛門からの排泄が困難となったためS状結腸に双口式のストーマが造設された。認知症はないが処置に対して説明しても理解が得られないことがあった。日常生活において全般的に依存的な性格であると長男より情報あり。入院中はセルフケアに関

しても看護師に頼る場面が多々あり、ストーマケアにも関心を持たなかった。退院後は施設へ入所予定だが、施設に空きができるまでは自宅で過ごすことになっていた。

III. 倫理的配慮

患者本人の個人情報に厳重に管理し、一切公表されることはないこと、研究目的、研究方法、研究結果の発表方法について説明し同意を得た。

IV. 看護の実際

患者にストーマケアの指導を行った。初めは「こんなことできないよ」と消極的な発言がみられており、ストーマケアについて看護師に頼って一切介入しようとしなかった。手技を何度説明しても覚えようとしなかったが、便破棄については、連日看護師と一緒にやり、理解できるまで繰り返し指導した。できていることを認め自己効力感を高められるように声かけをした。ある程度便破棄ができるようになったら、病室内のトイレに便破棄の方法について掲示をし、自立を促した。装具交換については、装具を剥がすこと、洗浄することは数回の指導でできるようになったが、装具の貼付については一切介入しようとしなかった。ス

トーマ周囲にびらんがみられていたため、看護師主体で装具の貼付を行うことが多かった。本人への指導が進まなかったため、装具の貼付は長男に指導を行った。

V. 考察・まとめ

退院時、患者は便破棄、装具を剥がす、ストーマの洗浄の手技が自立し、息子が装具の貼付を行うことで患者のストーマケアの確立ができた。繰り返し手順を説明したこと、便破棄の手順をトイレに掲示したことでA氏の手技の確立を促すことができたと考える。

患者に術前からパンフレットや実際の装具をみせながらストーマケアについて説明したが、消極的な思いがある様子であった。また、術後ストーマ周囲の皮膚トラブルを繰り返していたため看護師が主体となって装具の貼付をしていた。そのため患者は装具の貼付は難しい手技であると思っ

んでしまい介入しなかったと考えられる。術後、早期から指導を開始していればストーマケアを身近なものとして捉えてもらえたかもしれない。また、トラブルがあっても看護師で全て行うのではなく、装具を一緒に手にとって貼付してみるなど本人への指導も継続し、装具の貼付が簡単にできるということが本人に伝わるように関わっていくべきであった。

今後は、本人のADLや理解力、性格を考慮した上で、患者・家族を含めて目標を設定し、できることは患者の自立を促し、できないことは協力者が補い、ストーマケアの確立を目指していきたい

参考文献

- 1) 日本ET/WOC協会（編）. ストーマケア：エキスパートの実践と技術. 東京：照林社；2007.